

車いす、ベッドを替えるだけで介護負担も減る

要介護者に合った福祉用具を選ぶには専門的な知識が必要だ。間違った用具選んでQOLを損ねているケースも多い。

ある月曜日の夜。理学療法士の石濱裕規さんは、パソコンと大きな荷物を抱えて、東京都八王子市に住む斉藤實さん（49歳参照）の自宅を訪れた。リビングに車いすを出すと、クッションの座圧を測る機器をつなぐ。準備ができると、斉藤さんがそこに座った。

パソコンの画面には、斉藤さんが座ったクッションの座圧分布が表示されている。「なるほど、これだとずり落ちることはないけれど、前のほうに余計な圧がかかってしまいますね」と石濱さん。斉藤さんは座っていると、体がどうしても前にずり落ちていってしまう。無理な姿勢が続くと、お尻の一部分に過度の圧がかかる。そのため、斉藤さんの体に合ったクッションを検討していたのだ。

斉藤さんを介護する妻の百合子さんに

は長年の持病がある。そのため、百合子さんの介護負担が少しでも軽減できるように、福祉用具もさまざまに調整されてきた。この4カ月の間に、歩行器は何度も機種変更され、百合子さんが後ろから介助しやすく、かつ、小回りの利くタイプに替えられた。車いすも簡単に折り畳みができ、かつ座面の角度などを調整できるタイプに変更。ひざが悪く、しゃがむことが困難な百合子さんがブレーキをかけやすいよう、レバーに棒を取り付けて、後ろから簡単に手が届くようにした。「介護が楽に行えるよういろいろと

工夫を図ることで、楽しみが生まれてくるはず」（石濱さん）。百合子さんからもいろいろなアイデアが生まれている。

「特に重度の方は、福祉用具の見直しによりQOL（生活の質）が向上し、介護者の負担が減ることは多い」と石濱さんは力説する。車いす、歩行器、介護用

ベッドなど福祉用具・介護用品には、非常に数多くの商品がある。が、それらは十分に吟味されることなく、レンタルまたは購入されていることも少なくない。

片桐弘之さん（49歳参照）も、福祉用具の変更によってQOLの改善を実現した一人。両足が思うように動かない片桐さんは、ベッドからの起き上がりが困難だった。石濱さんは、片桐さんが得意なしっかり握る力を生かせるよう、ベッドを背上げ動作とともにサイドレールも上下するタイプに変更してはどうかと提案。今では片桐さんは、寝た姿勢から、ベッドを少し起せば、サイドレールにつかまりながら自分で起き上がることができる。生活環境を体の状態に合わせて調整するだけで、要介護者は生活しやすくなるのだ。



南多摩地域リハビリ支援センターによる福祉用具の情報サイト



上はベッドから自分で起き上がる片桐さん。右は斉藤さんが座る車いすのクッションの座圧を測る石濱さん



石濱さんは太田さんの状況から、まずは自宅内を移動できるようにすることを目標に定めた。ベッドから起き上がって座り、立ち上がり、廊

ニュータウンの団地……。確かに、体に不自由を抱えた人の外出を妨げるような住宅は多い。だが、外出さえままならない人にこそ、身体機能の維持や改善を図るリハビリは必要。そんな人たちの強いニーズに応えるのが訪問リハビリだ。

石濱さんは、白い軽自動車に乗り込み、1日だいたい6件の利用者宅を回る。多くの利用者は要介護度が3以上と高く、体の状態から生活の状況までさまざま。その一人ひとり合ったプログラムを考え、自宅でも少しでも自立した生活を送ることができるようリハビリを行う。

11月のある日、石濱さんが向かったのは八王子市内に住む太田昭一さん（72）の自宅。太田さんは脳梗塞によって左半身まひの後遺症と糖尿病、心機能障害（ペースメーカー利用）を抱えており、要介護度は4。今年6月から週1回の訪問リハビリを行っている。「（糖尿病悪化による再）入院先から自宅に戻ったとき、ほとんど動くことができず、どうすればいいか途方に暮れました」と話すのは妻の愛子さん（69）。ケアマネジャーに相談したところ、訪問リハビリを勧められたという。

体には不自由を抱えた人の外出を妨げるような住宅は多い。だが、外出さえままならない人にこそ、身体機能の維持や改善を図るリハビリは必要。そんな人たちの強いニーズに応えるのが訪問リハビリだ。